

めぐりあい

流動的な出会いの場における相互行為

A Chance Meeting – Interaction in Fluid Meeting Occasions –

清武愛流

KIYOTAKE Airu

立命館大学大学院応用人間科学研究科対人援助学領域

Ritsumeikan University Graduate School of Science for Human Services

Key words: コミュニケーションモード, 出会い, 流動性

目的

現代社会は、流動的なかかわりが増加し、人びとが個別化している社会であると捉えられている。その一方で、人の集まりの現象として「就活」や「婚活」といった「〇活」が増加し、仕事や人と繋がるような場が設定されるようになった。この集まりの特徴は、自身が気づいている課題の解決的な場であるがゆえに、手段的な集まりであり、この社会現象は、本田が述べる「ハイパー・メリトクラシー (=超業績主義) 化」を示している。ハイパー・メリトクラシー化とは、全人格に及ぶさまざまな側面を不断に評価のまなざしにさらそうとするはたらきをもつという。このことから、人や社会とつながりを作ろうとする場が設定されているにもかかわらず、ますます流動的なかかわりが増加する社会が推測される。このような社会で生きる人びとにとって、見合った社会的仕組みが作られないのではないだろうか。しかし、流動的なかかわりの現象について、あまり研究がされていない。そこで本報告では、このような現代社会に増加した流動的な出会いにおける相互作用に着目し、現代的集まりの可能性を提案する。

方法

(本研究科の活動である復興支援プロジェクト) 福島にいた一人のひととの流動的な出会いにおけるかかわりを、ドラマツルギー的視点をを用い、要素を加えた記述を行い、検討を行った。社会が設定しているストーリーに行き詰まり、ドリフトする人びとが増えていると仮定し、流動的なかかわりの場面に焦点を当て、コミュニケーションモードの抽出を試みる。

結果

かかわりにおける、4つの舞台(場面)を抽出した。①『スカウト』: 舞台は喫煙所だった。一人の老人が喫煙スペースに何か話しながら入ってきた。筆者は、話しの内容が聞き取れなかったが、かかわりが継続していた。老人に対する情報の多くは、「非言語的メッセージ」によるものであった。②『互いの役決め』: 舞台は市民が利用する建物の階段だった。老人は、自殺を考えていると発言する。筆者

は、それに受容をしながらも否定をする発言をする。老人は、筆者の発言を受容する。一部の単語だけではなく、文脈としてのメッセージが行き交っていた。③『役者に徹する主人公と徹することができない主人公』: 舞台は、建物の一室で漫画展のカフェスペースに移る。二人の役者は話し手と聞き手になり、別々の役を演じる場である。老人は、自身の現状と過去の経験について語り始める。聞き手は、老人がどのような人であるかを知り始める。また、オーディエンス(他の参加者)が部屋に入って来き、聞き手が対応していたため、老人も聞き手の別の役割を知るようになる。④『次の舞台へ』: 舞台は最初に出会った喫煙スペースである。話し手は聞き手に対し、ここまでの仮定に謝罪と感謝を告げる。そして、また会えるかどうか定かではないが、会えたときには元気な姿を見せることができるようにしておくという。聞き手は、話しての肩を叩き、この舞台に幕が閉じた。

考察

この流動的な出会いでは知らない者同士であったため互いに「内実」がわからない関係であった。しかし、時間とともに互いに知り合っていく過程であったことが分かった。また、老人が過去に語れずに一人で先の物語(虚構)を作っていた可能性が考えられる。しかし、表現することで気づいていなかった思いが引き出されていく様子が伺えたため、新たな物(実話)を作ることができたのではないだろうか。今後の課題として、この過程を更に緻密化することで「ムラ社会」のような共同体でもなく、完全なる「お一人様」でもない社会的装置をつくる手がかりになるのではないだろうか。

参考文献

Erving Goffman, 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*. (=1974, 石黒毅訳, 『行為と演技—日常生活における自己呈示—』, 誠信書房)
本田由紀, 2005, 多元化する「能力」と日本社会—ハイパー・メリトクラシー化のなかで, NTT 出版